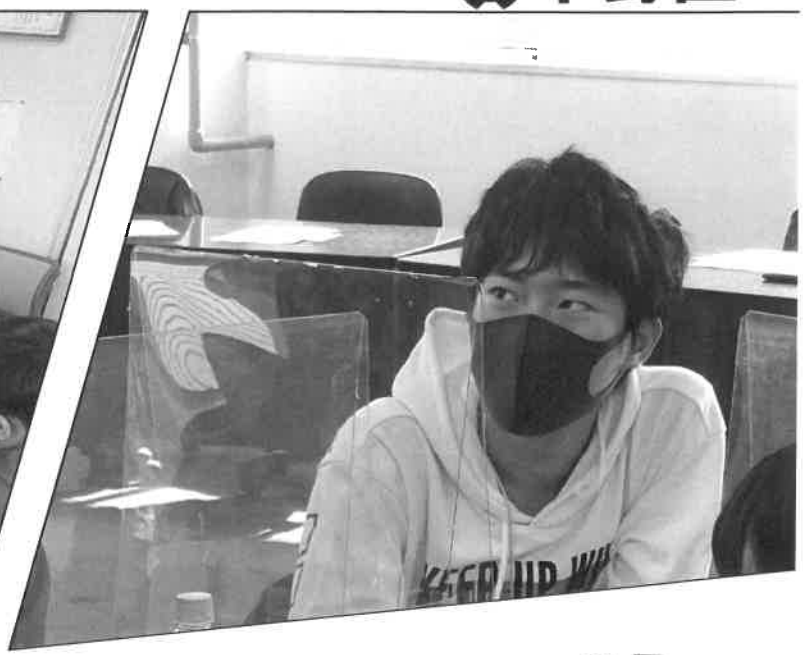
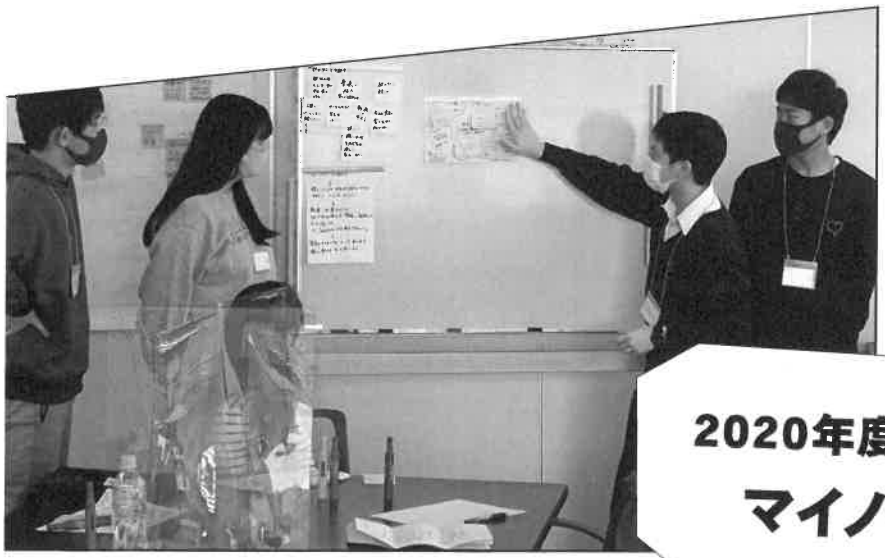
中野区



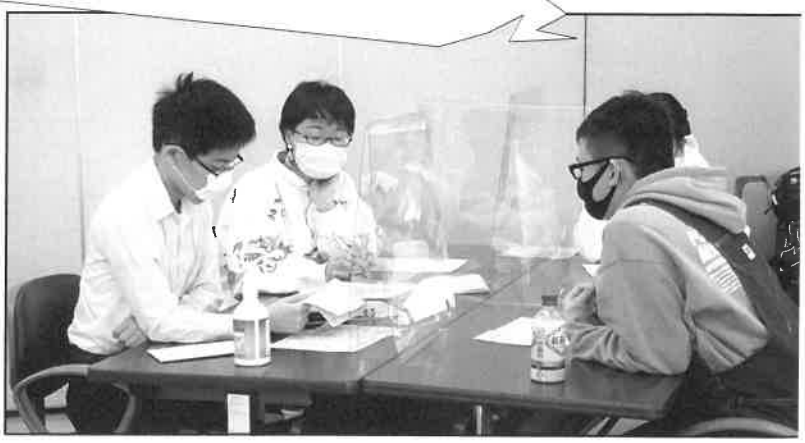
ハイティーン会議

2020年度 報告書



2020年度のテーマ

マイノリティ(少数派)



－目次－

1. ハイティーン会議について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

2. メンバー・・ 3

3. ワークショップの記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

4. 話し合いのまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

5. 感想・・ 15

6. 参考資料・・ 23

2020年度の活動について

2020年度のハイティーン会議は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、活動期間の短縮をするとともに、緊急事態宣言発令中は初めて web 会議システムを利用したリモート形式でワークショップを行いました。また、例年実施している地域の方々との交流会や取材、活動のまとめである報告会も、三密を避けるため実施はできませんでした。

コロナ禍の中で、様々な工夫が必要な活動となりましたが、一方でメンバーをはじめ、ファシリテーターやサポーターによって、新しい形で取り組むことができました。

この報告書で、その活動の様子を感じ取っていただけましたら幸いです。沢山の制約に悪戦苦闘しながらも、中学生や高校生が日頃感じる疑問や課題、正解のない問に取り組んだ活動の様子をお届けします。

1. ハイティーン会議について

（1） ハイティーン会議ってどんな会議？

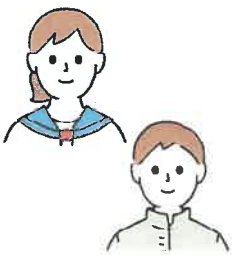
中野区に在住・在学・在勤している中学生・高校生世代が、毎日の生活のなかで気になっていることや疑問に思うことの中からテーマを設け、ワークショップ形式で話し合い、また必要に応じて関係機関への取材などを行いながら意見を深めていく会議です。2020年度で18年目を迎え、13名の中高生が6回のワークショップを通して話し合いをしてきました。

（2） ハイティーン会議の魅力

中野区の独自事業であるハイティーン会議はこんな特徴があります！

●身近な疑問を調べます！

毎年、参加したメンバーの中で話し合い、調べてみたい・深く掘り下げてみたいテーマを決定します。議論は活発に進むときもあれば、停滞することもあります。時間ギリギリまで何度も議論し、納得するまで話し合うことで、メンバーたちが成長していきます。

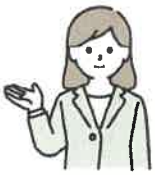


●様々なメンバーが集まります！

区内在住・在学・在勤の中高生世代が集まって活動をしていきます。中高生だけではなく、大学生や社会人から構成されるサポーターとの交流もあり、多くの人との出会いがあります。（2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大のため実施できませんでしたが、例年では交流会やテーマに則した関係機関などへの取材を通して、地域の方々や有識者の方とも交流することができます。）

（3） 支えるスタッフ

中高生が自由な話し合いを進めていくのに必要不可欠なのが“ファシリテーター”と“サポーター”です。毎回様々なサポートや話し合いが円滑に進むような楽しい仕掛けを考えてくれます。



●ファシリテーター

ハイティーン会議の中で、ワークショップの進行を補佐します。”答え”ではなく、ヒントとなるようなキーワードを投げかけることで、メンバー自身が考えを整理できるよう、背中を押してくれる存在です。

●サポーター

ファシリテーターと共に、よりメンバーに近い立場で、助言や資料作成作業のサポートを行う、大学生～社会人のボランティアスタッフです。

（4） 2020年度のハイティーン会議の流れ

2020年度は新型コロナウイルス感染拡大及び緊急事態宣言の発令などの影響により、活動の開始が11月となりました。また、緊急事態宣言発令中は、集まることを控えるため、Web 会議システムを使用したリモート形式で行いました。

①顔合わせ

参加を希望してくれた中高生が初めて顔を合わせました。みんな最初は緊張していましたが、アイスブレイクを通して打ち解けていきました。

②テーマ決め

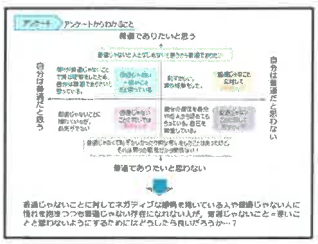
中高生が日ごろ疑問に思っていることについて項目出しをして、テーマを決めました。同年代の仲間たちが日ごろどんなことに興味を持っているのかお互いに興味津々のようでした。

③話し合い

決定したテーマについて、さらに深く掘り下げて話し合いを進めました。自分の考えを発表したり、相手の意見を聞いてみたり、話が行き詰った時は、サポーターが手助けをしてくれました。

④意見聴取や実践

話し合いの中で、疑問に思ったことについて、必要に応じてアンケートを行うなど、実際に行動に移すことに挑戦しました。



⑤まとめ

活動で話し合ったことをまとめ、班ごとに発表をしました。
また、1年間の活動を振り返りました。

2.メンバー

2020年度もハイティーン会議は地域や学校を超えてメンバーが集まりました。初めて参加するメンバーもいれば、数年間継続して参加してくれるメンバーもいます。2020年度は、8つの学校の中学2年生から高校2年生が集まりました。

●参加者の学年内訳

	1年生	2年生	3年生	合計
中学生	0	1	5	6
高校生	1	6	0	7

●参加者の学校内訳

種別	学校名
区立中学校	中野東中学校
私立中学校	明治大学付属中野中学校
公立高校	都立国際高等学校 都立新宿高等学校
私立高校	明治大学付属中野高等学校 学習院女子高等科 宝仙学園高等学校 静岡聖光学院高等学校

3. ワークショップの記録

(1) 2020年度のテーマ

「マイノリティ(少数派)」

文化・宗教のほか、学校生活の中で自分たち自身が感じるマイノリティへの疑問。少数派の方の意見を知りたい、少数派の方の気持ちに寄り添いたい。そんな思いから2020年度のテーマとして設定しました。

(2) 第1回ワークショップ(2020年11月1日)

感染対策を十分に講じたうえで、中野区役所内で行いました。開始直後は、参加メンバーの表情も硬く、緊張している様子でしたが、アイスブレイク(緊張をほぐすためのゲームなど)を通じて打ち解け、会場の雰囲気も柔らかいものへと変わっていきました。

グループに分かれて「今興味を持っていること」をはじめに発表し合い、続けて「ハイティーン会議」で話し合ってみたいことについて考えてみました。

参加メンバーからは、「個性・マイノリティ」のほか、「5G」「留学」など、様々なテーマが提案されました。

▲意見出しの様子

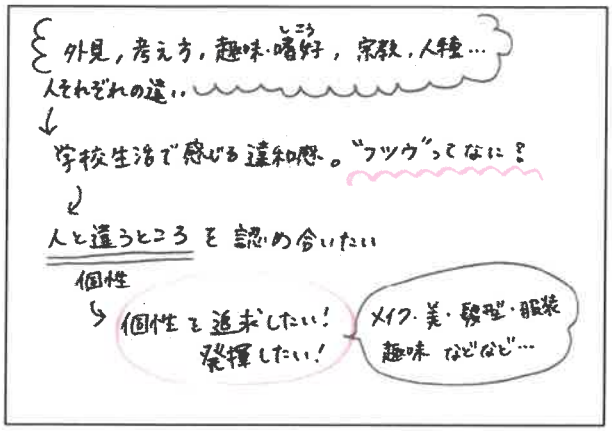
▲発表の様子

▲興味のあること(一部抜粋)

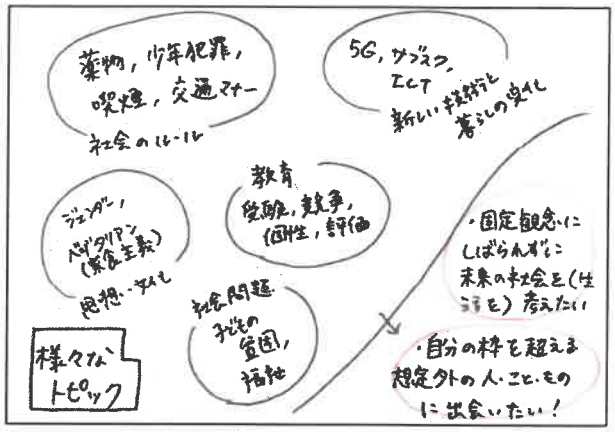
▲話し合ってみたいこと(一部抜粋)

(3) 第2回ワークショップ(2020年 11 月22日)

前回出た意見を整理し、テーマをグループ化する事で、テーマの全体像が見えてきました。メンバーは"それぞれの個性や個人の考えを尊重したい"という思いを大切にしながらグループに分かれ、さらに議論を深く掘り下げていきました。



▲フツウって何だろう？(グループ A)



▲固定観念に縛られずに考えたいこととは？
(グループ B)

「フツウとは何か」「固定観念に縛られずに考えたいこと」について、個人の経験や価値観を交えながら意見を出し合いグループごとに発表をしました。普段学校の友達同士では話し合いにくいようなテーマを扱うため、他のメンバーの意見に興味津々な様子でした。

フツウと言われる事って多数意見なだけなんじゃないかな？

当事者が居ないのにジェンダーについて話してもいいのかな？

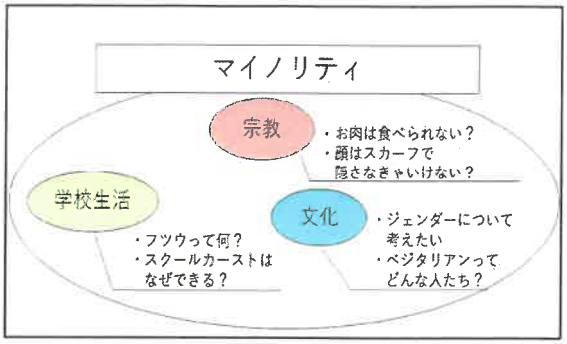
自分の思想・文化を他人に押しつけるのは良くないよね…

普段の学校生活の中にも疑問が沢山！

(4) 第3回ワークショップ(2020年12月20日)

2回のワークショップを終え、メンバーの意見をまとめました。2020年度のハイティーン会議のテーマは「マイノリティ(少数派)」となりました。文化、宗教のほか、学校生活で感じる様々なマイノリティについて、取り扱うこととしました。

参加してくれたメンバーは、マイノリティとして生きづらさを感じている人に対して、理解したい・寄り添いたいという気持ちを大切にしていました。



話し合いをさらに進めていく前に、マイノリティに対して「自分たちはどう思っているのか」を再確認するため、サポーターや区職員と中高生で二人組になり、お互いの意見を発表し合いました。想像以上に楽しい場となり、のびのびと自分の考えを言葉にする事ができました。

Q.なぜマイノリティが気になるのか？興味があるのか？

●意見の紹介

・マイノリティの人との考え方の違いが気になったから
・分からない事に対して気になったり知りたくなったりするから。
　だけど相手側が強要してくるのはいやだと思う
・ボランティアが好きでマイノリティの人の力になりたいから
・少数派の人の気持ちを考えるのが好きだから
・どれだけの人がこのことについて知っているか、考えているか興味がある
・周りからよく思われるために、マジョリティ(多数派)になってしまうこともあるから
・自分の通う学校にマイノリティの人がいたから
・漫画やアニメで題材にされていて興味を持ったから
・身近にいて、行動や発言に気をつけるようになったから

自分自身の考えを再確認し、今後は3つのグループに分かれ、3つの視点からマイノリティについて考察していくことになりました。

Aグループ

「”フツウ”って？」

学校生活の中で感じる”フツウ”っていうのは何だろう？

Bグループ

「ベジタリアン」

ベジタリアンってどんな人たち？ベジタリアンについて考える前に、自分自身がベジタリアン生活を体験してみたい。ベジタリアンではない自分たちに何ができるか考えてみたい。

Cグループ

「貧困・格差」

貧困に該当するのはどこからだろう？相対的格差の基準はどこからだろう？子どもの剥奪指標(※)について、思うことを議論して、人によってどのような部分で受け止め方に差が生まれるか考えてみよう。

※子どもの剥奪(はくだつ)指標とは

経済的状況が標準的な家庭と比べて、その子どもが何を奪われているかを調べる指標

(例：毎年新しい服を買ってもらえない、自宅に宿題をする場所がない　など)

(5) 第4回ワークショップ(2021年１月31日) ※リモート開催

緊急事態宣言発令に伴い、ハイティーン会議開催史上初となる、Web 会議システムを使用したリモート形式でワークショップにチャレンジしました。アイスブレイクとして「おうちにあるものしりとり」をしたあとに、Web 会議システムの機能を活用し、グループに分かれて話し合いを行いました。区役所の会議室で行うのとは異なり、他のグループが何を話しているのか共有しにくいため、最後に各グループで話し合ったことを、発表し合いました。

通信トラブル等にも見舞われ、慌てる場面もありましたが、リモート形式でもテーマについてメンバー間でさらに掘り下げた議論ができました。

▲複数のタブレットを使いながら
ワークショップを進行する様子

▲画面上で出欠をとる様子

(6) 第5回ワークショップ(2021年2月21日) ※リモート開催

グループごとに、意見交換や考察などを行ったうえで、話し合いを進めました。また、必要に応じて身近な人たちにアンケートを行い、その結果を基に各班でさらに自分たちの考えを検証しました。コロナ禍の中で直接集まることができず、例年の様に考えを模造紙等にまとめる事はできないため、考察やまとめ方法を工夫することになりました。その結果、体験したことを動画にまとめたり、リアルタイムでパソコン上での共同作業ができるパワーポイントを活用したりなど、例年にはない試みが見られ、リモート形式でのワークショップ開催スキルも回を重ねるごとに上がっていきました。

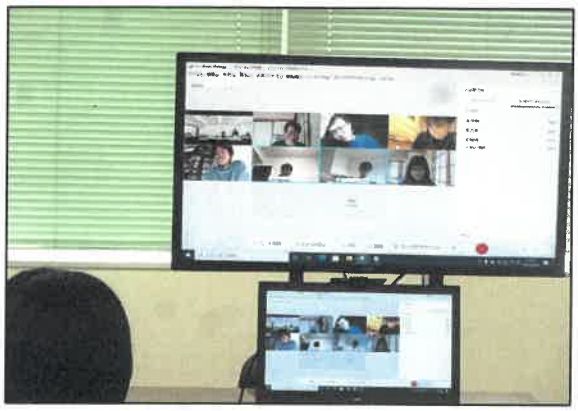
▲リモート会議の回数を重ねるごとに
進行がスムーズになりました。

▲肉等を使用しない料理にチャレンジ。
動画もメンバー自らが編集しました。

(7) 第6回ワークショップ(2021年3月20日) ※リモート開催

引き続き緊急事態宣言発令中であったため、最終回ではありましたが、Web 会議システムを使用したリモート形式で行いました。グループごとに今までの話し合いの結果を報告しました。また、ワークショップの後半では、新しくグループを編成し直し、ハイティーン会議に参加した感想や、今後活動をもっと楽しく、有意義なものにするにはどんな取り組みをすると良いか意見交換を行いました。

▲区役所の会議室からワークショップを進行するファシリテーターとサポーター



▲メンバーが自宅やカフェなどから参加し、議論を重ねる様子

番外編 コロナ禍でのハイティーン会議

2020年度は、感染予防のため、検温・こまめな消毒・換気の実施等を行いながらハイティーン会議を進めていきました。

また、リモート形式で開催する際は、スタッフ間の連携をうまく取るために、事前に打ち合わせを行い、各回の進行手順や役割を確認しました。初めてのことでスタッフにも戸惑いがありましたが、試行錯誤を重ねて、回を追うごとにワークショップの進行が円滑になっていきました。

▲消毒を行う様子

4.話し合いのまとめ

マイノリティについて、3つのグループに分かれ、それぞれの視点から話し合いを進めました。ここでは、各グループで行った話し合いのまとめをご紹介します。

(1) Aグループ 「”フツウ”って？」

① きっかけ

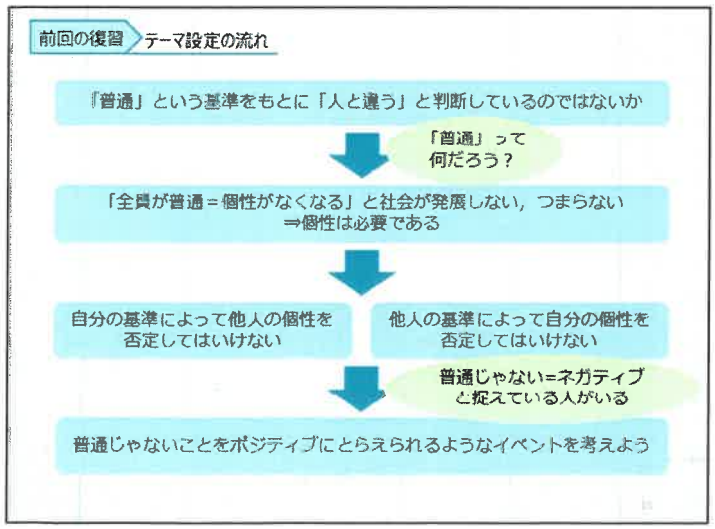
このグループでは、学校生活に着目し、普段何気なく使われている「フツウ」という言葉に疑問を持ったことからスタートしました。Aグループは主に中学生メンバーで構成されていたこともあり、中学校生活のなかでの実体験を語り合いながら話は進んでいきました。

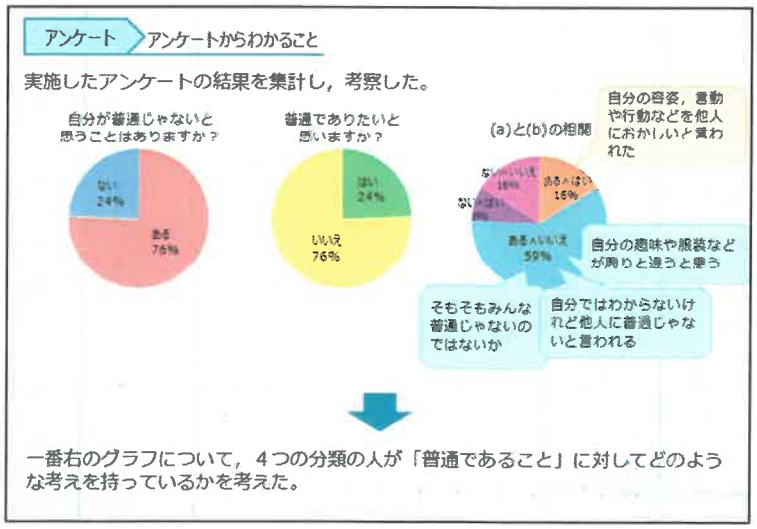
スクールカーストってなんだろう？

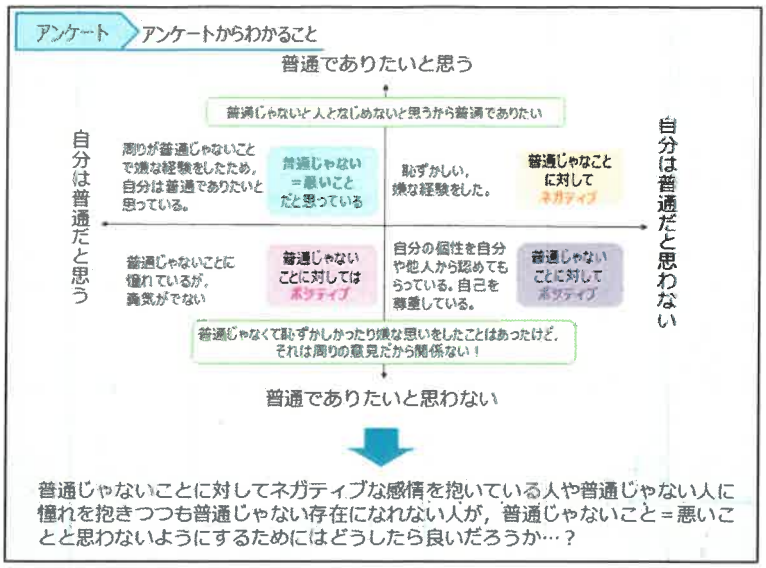
何気なく使っていたけどフツウってなんだろう？

② 考察

「フツウ」でないことを、プラスに「個性」と捉えるか、マイナスに捉えるか。他グループのメンバーなどにアンケートを行って考察を進めました。「自分をフツウと思うか？」「フツウでありたいと思うか？」と質問をし、4つのタイプに分類をしました。自身のことを「フツウじゃないと思うけれど、フツウにはなりたくない」と思っている人がいるなど、分類をする事で、新たな発見を得ることができました。







また、分類後には「自分をネガティブに思っている人に対して、自分たちは何ができるだろう？」とメンバーで話し合いました。

③ まとめ

グループＡは、個性を認めて輝いている人と交流したり、意見を聞けるような場があると良いと考え、自分だったらどんなイベントに参加してみたいか、メンバー内で案を出し合いました。コロナ禍の中ということもあり、実際にイベントを実施することはできませんが、理想のイベントを考え、テーマ案を「新しいワタシと出会う文化祭」としたイベントのポスターを作成しました。

ネガティブに捉えられやすい事を実際に体験したり、知る機会を設けることで、自分自身の意識を変えることができるとまとめました。

個性を大事にし、自身の個性をネガティブに思っている人に対して寄り添いたいというＡグループの思いが反映されたまとめとなりました。

(2) B グループ 「ベジタリアン」

① きっかけ

このグループでは、ベジタリアンに注目し、自分たちに何ができるだろうと考え始めたところからスタートしました。調べるだけではなく、自らベジタリアン生活を体験することでベジタリアンの気持ちに寄り添ってみようと「1週間ベジタリアン生活」を試みました。

▲作成した動画のタイトル画面

② 考察

自宅で調理をしてみたり、市販の食品や学校の食堂など、様々な場面でベジタリアン生活にチャレンジしました。体験を通じて、多くの食材や料理に肉が入っていたり、エキスが入っていることに気づいたり、成分表示を細かく表示している飲食店は少なく、ベジタリアンの方々の不自由さを体感する事ができました。また、体験の記録をメンバー自ら動画を撮影・編集し、わかりやすく伝えることにも挑戦しました。

ベジタリアン生活を実施した結果、以下のように感じました。

【メリット】
・体調が改善された。
・健康志向だと思われることが多かった

【デメリット】
・味が飽きてしまう。
・献立を考えるのが難しい。
・調味料も意外と使用できるものが少なかった。

【わかったこと】
・気をつけると化粧品にも含まれていることがある。
・調味料は様々なエキスが使用されていることがある。
・製品のパッケージには記載があるが、お店には成分表示がないものが多かった。
・ヴィーガン(※)料理のお店はあるけれど、一般メニューと両方を取り扱っているところは少ないと感じた。

※ヴィーガンとは
完全菜食主義者(動物の肉だけではなく、卵や乳製品などの動物性食品を一切食べない)

体験を通じて、目の悪い人がめがねをかけるように、食生活にも選択肢を増やすことが必要なのではないかと実感しました。マイノリティの人が生活しやすくなるだけでなく、みんなが生活しやすくなるように目指していくことが大切だという感想も生まれました。

③ まとめ

自分たちで体験してみた上で、相手の立場に立って、中高生として何ができるか検討した結果、中高生ならではのSNSの活用や、友人間の口コミ等によって、食材やマイノリティについて広めていけるのではないかというアイデアも提案されました。また、自分でスーパーなどでベジタリアンの方がよく食べる食材を購入することでベジタリアンの方々を応援をしたり、学校の食堂にそうしたメニューがあれば多くの人たちの理解が深まるのではないかと、グループの意見がまとまりました。

”実際に自分たちで、体験してみる”という取り組みはハイティーン会議初の試みであり、区役所の会議室に集まってハイティーン会議を行うことが難しい状況の中で、新たな視点で考察する経験となりました。

(3) Cグループ　「貧困・格差」

① きっかけ

このグループでは、マイノリティについて話を進めるうちに、「格差」や「子どもの貧困」について話し合うことに意見がまとまりました。格差には絶対的なものと、相対的なものがある中で、今回はより中高生にとって身近な「塾に行くことができない」などの相対的格差について議論していくこととしました。

② 考察

グループで話し合う中で、「子どもの剥奪指標」などを参考に、一般的に「フツウ」とイメージされる子どもの生活環境について意見を交換しました。また、他のグループのメンバーに対して「学校の授業について不満があるかどうか」「アルバイトをしたいかどうか」など、学校生活に関するアンケートを行い、学校生活に対する各メンバーの「フツウ」と思うことについて議論しました。 また、さらに話を進めていく中で、「受験でしか使用しない科目を学校で学ぶことは必要なのか？」「学びたい科目を自由に選択したい」など、Cグループは高校生から構成されていたこともあり、「高校生活の中で、決められた科目をあたり前の様に学ぶことを”フツウ”と感じて良いのか」という点にも議論が広がりました。

遊びに行くときの
交通費は必要だよ

友達とご飯に行く
お金もほしいなぁ

アルバイトもしたいけど
できない場合もあるよね

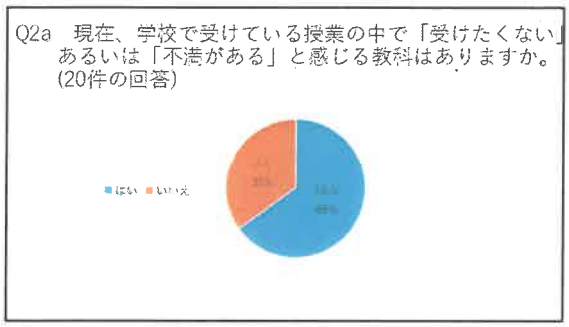
自分の受けたい授業の科目を
選択できるようにしてほしいな

塾は高いよね。
学校の授業だけでは
受験は不安かな、、

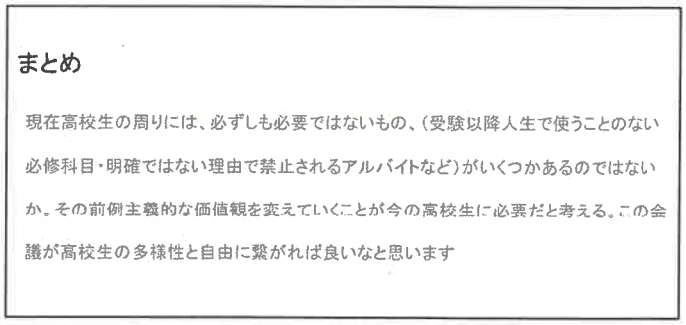
③ まとめ

自分たち高校生を基準として生活を振り返ったり、子どもの剥奪指標を考えた際に、留学や学習塾、アルバイトなどについて、選択できるようになって欲しいとの意見や、同年代の人にも考えて欲しいとの意見が多く出されました。子どもの剥奪指標を通じて、調べても出てこない、表面的には気づかない、当事者だからこそ気づく辛さ、中高生世代が気になる子どものマイノリティ・格差についてまとめました。

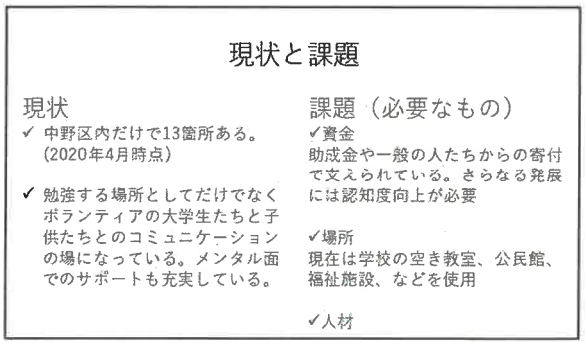
また、メンバーは、無料学習支援塾にも着目し、貧困や格差を解消していくために高校生にどのような取り組みができるのか、興味関心を持って欲しいと意見を熱く語り合っていました。また、子どもたちが生まれた環境によって、その後の人生を左右されることなく、誰一人取り残されないような教育の機会が十分に整えられることの大切さを改めて実感していました。



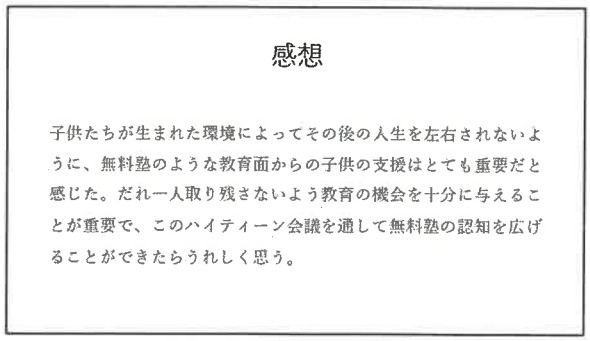
▲意見徴収の結果(作成スライド)



▲活動を通じての感想(作成スライド)



▲無料学習支援塾の現状と課題(作成スライド)



▲活動を通じての感想(作成スライド)

5.感想

メンバーはもちろん、ハイティーン会議を進めていくうえで必要不可欠なファシリテーター、スタッフからも感想をいただきました。

(1) メンバー

- 星野さん(中3)

違う学校の人や、学年の異なる人たちの意見が沢山聞けたので、これまでとは別の視点で物事を考える事ができました。学校に行っているだけではできない色々な話し合いができたので、良い体験になりました。今年度は回数も少なく、出席できないこともありましたが、それでもマイノリティなどに関して自分の意見を言葉にして人に伝えることは初めてだったのでとても新鮮な気分でした。

- 榎本さん(中3)

楽しかったし、自分の思っている事を気持ちよく伝えられたので、満足でした。活動を通じて、将来仕事をするにあたって必要になるトーク力、プレゼン力を鍛えられたと思います。いろいろな人が集まっていて考え直したりするのも楽しかったです。

- 川上さん(中3)

他校の生徒との意見交流ができたこと、授業外でこのような深い議論を同年代の友達とできたことは、とても自分にとってプラスになったと感じました。みんなと話し合ったり、案を出し合うのはとても楽しかったし、毎月ハイテイーン会議の日を楽しみにしていました。とても良い思い出になりました。ありがとうございました。

- 西郷さん(中3)

普段自分では考えないことを考える機会となり、学びの場となりました。今回はオンラインでの開催もありましたが、今どきだなと感じました。また、ワークショップの中で行ったアイスブレイクが楽しかったです。

- 滝沢さん(高2)

自分とは違う世界にいる同世代の人と関係を持てたことは良かったです。例年と違った形での開催だったので出来ることに制限はありましたが、その中でも工夫を凝らして会議を進められたのは良かったです。今年度見つけられた良い点は次年度以降も継続して活用していくとより充実した会議になると思います。来年は高 3 ということもあり参加自体は難しいと思いますが最後のお別れがリモートになってしまうのは個人的に残念なので、またどこかでみんなに会いたいです。3 年間ハイティーン会議に参加して沢山のことを学ぶことができました。本当にありがとうございました。

- 赤堀さん(高2)

同世代の人たちと知り合えて、人脈が広がる点に関しては機会をくださってとても感謝しております。同い年の人たちの興味がどこに向いているのかを知ることはとても新鮮でモチベーションも上がりました。また、サポーターの方々のご意見なども刺激的でした。普段の生活の中で何気なく見過ごしてきてしまっていた問題に当事者意識をもってディスカッションすることで、視野も広がりました。中野区に住んでいても小学校が私立だったり、なかなか地元に友達がいない私にとって毎回の会議はとても楽しかったです。学校では教えてくれない、また自分からわざわざ考えたりしないトピックについて目を向けられるのがこの会議の良さだと思います。今回学んだことやいただいた刺激をもとに大学進学、そしてその後のプランについても考えていきたいと思います。

- 成田さん(高2)

今年はコロナの影響で限られた時間で立案からまとめまでこなさなければならず、とても大変でしたがなんとか形になりました。僕は高校生の自由という自分に身近なテーマで、充実した話し合いができました。また、発表方法も多様で、特にＢグループの動画作成が凄いと思いました。色々な背景を持った人と話しあえることが、ハイティーン会議のおもしろいところだと思います。

- 塚本さん(高2)

自分の周りでは、このように議論をする機会がなかなかないので、ハイティーン会議で、気持ちを発散させることができて良かったです。

- 斎藤さん(高2)

ハイティーン会議で出来た関係だからこそ、普段友だちとしないような堅めの話ができますし、それがこの会議の魅力的な部分だと思います。少し不完全燃焼な部分はありますが、満足に集まれない中でこのクオリティの成果ができたことは素直に嬉しいです。もっともっと思考力とディスカッションの力を付けたいです。

(2) ファシリテーター

大阪教育大学　総合教育系教育協働学科　特任講師　松山鮎子　先生

「人生 100 年時代におけるハイティーン会議の役割―感想に代えて」

今日の社会経済、とくに就労構造の変容や価値観の多様化などによって、人々の生活が不安定の度合いを深め、さらに急速な少子高齢人口減少、人生100 年時代の到来、という未曾有の人口構造の変化に見舞われて、社会に悲観論が蔓延する事態が招かれています。こうした社会状況を背景として、いま改めて、一人ひとりが社会に位置づき、豊かに生を全うすることとそのための支援のあり方を問い返し、またこの社会をどのように次の世代へとつなげて、社会の持続可能性を高めるのかが課題となっていると考えられます。
さらに、昨今の新型コロナウイルス感染拡大にともなって休校措置がとられたように、学校教育・社会教育のみならず、社会全体で人々のつながりのあり方を再検討することが求められています。

このような社会的な要請をふまえて既存の教育制度の体系に組み込まれたのが、人生100 年時代の初期に位置づけられる学校教育において、生涯学び続け、主体的に社会を担っていく存在として自己を形成し続けるための基礎的な力を養うことであるととらえられます。その一例が、昨年から小学校で実施されている新学習指導要領で、その基本的な考え方は、子どもたちの学びが学校では完結しないことを前提に、生涯学び続ける基礎的な力を養うということにあります。また、コミュニティスクール構想に示されるように、高齢者をはじめとした大人が、子どもたちの育成にかかわることで、子どもたちを主体的で探究的な存在へと育むことで、この社会を持続可能なものへと組み換えようとすること、さらにそれらの実践を通して、地域社会に生きる大人自身のあり方も自律的な存在へと組み換えようとする方向性をもった取り組みも、これに当てはまります。

しかもこのことは、コロナ禍にともなって直接の対面のつながりが避けられ、オンラインとなる中で、私たちがどのようなつながり方をつくりだすことができるのか、また、GIGA スクール構想の展開にともない進展するであろう学習の個別化がもたらす子どもたちの人間関係の変容を、どう新たなつながりへと組み換えていくのかという課題と深くかかわっていると思われます。それは端的に、これまでの集団主義的な、ある種の帰属にもとづく同調性を基本とするのではなくて、「ことば」を用いた論理的で対話的な関係をつくりだすことで、相手に対する想像力に定礎された、配慮に満ちた関係を社会の中に意識的につくりだすことの重要性を問いかけているのではないでしょうか。

こうしたことを前提に、ハイティーン会議の取り組みが、これまでどのようなことを大切にしてきたかをとらえ返してみると、それはまさに「ことば」を用いた論理的で対話的な関係を、同世代の子どもたち同士、あるいは年齢や立場の異なる人たちと子どもたちとの間に

つくりだすことであったと感じます。また、正解のないさまざまな問いに取り組んでいくことが社会レベル、個人レベルで求められる時代において、これからのハイティーン会議の役割は、子どもたちの好奇心に火を灯すことや、子どもたち自身の探究の種を蒔くこと、さらに、互いに異なるものの見方をする大人も含めたメンバー全員が、話し合い、行動する力を身につけることにあると考えられます。

とくに今年度のテーマである「マイノリティ」は、どうすれば異なる価値観をもった人同士がつながり、一人ひとりがきちんと社会に位置づきつつ気持ちよく生きられるようになるのかという、冒頭述べたような社会的な課題にも通じる問いへの答えを、子どもたちが自分たちの身近な経験から考え、表現しようとしたものであったと考えられます。もちろんこれは、ハイティーン会議の場だけで答えの出るような簡単な問いではありません。その意味で、全メンバーが今回話し合った「マイノリティ」について、これからも考え、行動し続けていってくれることを切に願っています。

最後に、今年度のハイティーン会議は、コロナ禍の影響で話し合いの環境づくりから大変な苦労がありました。ただ、このような状況に今現在も私たちがおかれているからこそ、ハイティーン会議のような自由に何でも言い合える場の必要性と意義をこれまで以上に感じられたとも思います。あらためて、区職員およびサポーターの皆さんがゼロからの環境づくりに前向きに取り組んでくださったことへ心より御礼申し上げます。

(3) サポーター

- 保科さん(ハイティーン会議 OG)

普段あまり人と話す機会がないので、中高生のメンバーやサポーターと話をすることや、話し合いが自分が予想していたのとは違うように進んだ時の中高生らしい斬新な意見を聞くのが新鮮で楽しいです。今年度はサポーターとして行うことが前年度より多かったのですが、自分でワークショップ用の資料を作成したり、話し合いの時間配分を考えたりするのが楽しかったです。回数も少なく時間があまりなかったため、スタッフ側が話し合いを誘導する箇所が複数あったのが少しもったいないように感じました。ワークショップ中にメンバーからの意見が出ず、話し合いが止まってしまったときに上手に話題を提示できなかった点は反省すべき点だと思います。テーマについて最近のニュース記事やトピックを予め調べておくべきだったなと思いました。

- 西野内さん

私は塾など中高生と関わるアルバイトをしておらず、弟や妹もいないので、中高生がどのようなことに興味・関心を持っているのかをハイティーン会議を通して知ることができました。私は中高生のとき、あまり考えることなくなんとなく過ごしていたのですが、ハイティーンのメンバーはみんな気になるニュースや社会課題などがあり、すごいなあ！とたくさんの刺激をもらいました。サポーターである私よりも中高生の方がよっぽどしっかりしていている！今年度は異例の年で、リモートによるトラブルが色々ありましたが、そのような環境の中でもみなさんで色々工夫しながらハイティーン会議を行えて本当に良かったです。ありがとうございました！

昨年度は「行列と心理」、「校則」という異なる2つのテーマを扱いましたが、今年度はどのグループも「マイノリティ」に関わるテーマだったのが面白かったです。短い期間の中で、伝えたいことをまとめるのはメンバーにとってかなり大変だったと思いますが、自ら動画やスライドを作成するなど主体的に行動してくれました。メンバーのみなさん、本当にご苦労様でした！

サポーターとしてもっとこうすれば良かったのかなという個人的な反省点は色々あるのですが、サポーターとしてどこまで意見を言い、どこまでサポートすれば良いかを見極めるのは特に難しかったです。また、リモートだと他のグループの様子を伺うことができないので、もう少しサポーター同士で情報共有したりする時間を作っていたらより良かったかもしれません。

- 佐竹さん(ハイティーン会議 OG)

私自身他のサポーターの方々と比べてまだまだ未熟ですし、メンバーも意志を持って会議に参加してくれている強者です。そのため、メンバーが成長しているところを見られたというよりかは自分が成長させられていると感じたことの方が数は圧倒的に多かったです。なので、そんなメンバーに少しでも考える手がかりを渡せるように、毎回試行錯誤をしながらメンバーと対話をしています。そんな中でも自分がした質問で少しグループの会話量が増えたり、メンバーが何かに気付いた顔をしてくれたりすると本当に嬉しいです。

また、サポーターと職員さんの打ち合わせの時間で、自分の何気なく発した考えが採用されたときはガッツポーズしたくなりますし、やりがいを感じます。これからも 1 を 100 にできるようにエンジン全開で頑張ります。初サポーター、山梨からの参加、新型コロナウイルス感染拡大、リモート WS……こんなに情報量の多いハイティーン会議は初めてでした。朝 5 時に起きて 6 時過ぎの電車に乗るのはほんとに大変でしたが、ハイティーン会議に来ると来たで元気を貰えたのは確かです。

私事ですが、大妻中野に通っていた年数を、ハイティーン会議に参加するために中野に来ている年数が追い越しました。毎度のことながら中野区民でも中野区在学中でもないただ中野区に 3 年通ったことのある私を温かく受け入れてくださる中野区の職員の方々には頭が上がりません。サポーターになったら少し距離が空くかなと思いきや、リモートでの開催となり打ち合わせやメールの回数が増えることでそんな懸念はどこかへ飛ばされてしまいましたし、いつも以上に心の距離は密でした。

メンバーの中には、今年の会議の回数が少なかったため想定していたほど発言できなかった、自分の考えを共有できなかった、思うように発表ができなかったと考えている方も多いと思います。しかし 2020 年という人生で 1 番最悪かもしれない年に、ハイティーン会議に参加しようと思った時点であなたは既に強者です、安心してください。今、世界が手探りで前に進んでいるのと同じでハイティーン会議も試行錯誤しながらより良い形を探し続けています。だからもし、今年思ったようにいかなくても、来年以降また新しい形の会議で好奇心をぶつけてほしいと私は思っています。なので、来年も参加して下さると嬉しいです。

最後になりましたが、メンバー、中野区職員の方々、松山先生、サポーターの方々など、2020 年度中野区ハイティーン会議を支えてくださった全ての方々に御礼申し上げます。2021 年度も起爆材として励んでいくつもりですので、どうぞ今後ともよろしくお願いします。

- 周さん

自分自身の中高生時代と思い出しながら、メンバーの考えに寄り添えるところにやりがいを感じます。ときどきメンバーがテーマや意見を出し合う際、「当時の中高生私だったら、どう考えるのかな」など考えたりしています。また、メンバー達は自発的に様々な内容を提案しているため、私自身にとっても新しく物事を知る機会となり、とても勉強になりました。話を深く掘り下げていく中で、グループ内の話がまとまるよう促すことを意識して行っていましたが、話を早く進めるために、様々な考えが言いにくい雰囲気を作ってしまったことが反省点です。これをきっかけに、これまで漠然としか考えていなかったメンバーへのサポート方法について意識するようになり、メンバー全員が話しやすい環境を提供するため、質問をする際は、ゴールを見据えて簡単な質問から投げかけ、次の質問への答えにたどり着くサポートをできるように行いました。また、発言する際は元気に話すよう心がけました。その結果、メンバーもたくさん発言でき、内容も充実できたと思います。

コロナで人と会う機会や話す機会がなかったため、ハイティーン会議に参加しいろんな人と話す機会が増えて、本当に嬉しかったです。

6.参考資料

(1) 2020年度ハイティーン会議 活動記録

回	日 時	場 所	内 容	人数
1	11月1日(日) 10時～13時	中野区役所	第1回ワークショップ テーマ決め①	11
2	11月22日(日) 10時～12時	中野区役所	第2回ワークショップ テーマ決め②、話し合い①	11
3	12月20日(日) 10時～12時	中野区役所	第3回ワークショップ 話し合い②	8
4	1月31日(日) 10時～12時	リモート	第4回ワークショップ 話し合い③	9
5	2月21日(日) 10時～12時	リモート	第5回ワークショップ 話し合い④、まとめ準備	7
6	3月20日(日) 10時～13時	リモート	第6回ワークショップ まとめ	6

（2）これまでにハイティーン会議で取り上げたテーマ

2003年度

「10 代の子どもたちに魅力的なまちとは」

中野区の長所や短所を考えたり子どもを取り巻く国際状況などを知る中で、中野の活性化のために「中高生の活動場所」・「中野区の公園」・「放置自転車対策」について課題を見つけ調査しました。

調査するにあたり、ゆう杉並や城山ふれあいの家を見学、公園の調査、23区の放置自転車対策の調査などを行いました。

2004年度

1「これからの学校」

中野区立小中学校の再編計画について興味を持ち、子どもの視点から学校・教育について考えました。中野区立小中学校へのアンケート調査や教育委員会への取材を行いました。

2「交通安全」

なぜ地下鉄東高円寺駅前の信号が工事され新しくなったのか、その理由を調査しました。東京都第三建設事務所、杉並警察署に取材を行いました。

2005年度

1「恋愛」

高校生世代は恋愛と言うものをどのように考えているのかについて疑問を持ち、高校生に対して恋愛に関するアンケートをとり、高校生世代の恋愛観について考えました。

2「選挙制度―未成年者への参政権―」

法律に年齢制限が規定されている法律があること、その中でも特に選挙制度における年齢制限について疑問を持ち、区内の高校にアンケートをとるなどして調べ考えました。

3「裁判員制度―あなたが裁判員になったとき―」

日本で導入が検討されている（平成17年度現在）裁判員制度の仕組みや導入目的、基準等を調べ、考えました。東京高等検察庁へ取材を行いました。

2006年度

1「少年犯罪について」

何故、自分たちと同世代の人たちが罪を犯してしまうのか、何故、思い止まることができなかったのかということに疑問を感じ、（財）矯正協会や弁護士の方への取材を行いました。

2「児童労働」

国によっては、学校にも行けず働かされている子どもがいるということを知り衝撃を受け、児童労働がなくならない理由や自分たちに出来ることを考えました。ILO駐日事務所へ取材を行いました。

2007年度

「いじめを無くすために」

いじめについて、文部科学大臣あてに自殺予告の手紙が届いたという事件をきっかけに、いじめについて考えました。文部科学省やフリースクールの関係者への取材を行いました。

2008年度

1「Global warming」

地球温暖化について小池百合子元環境大臣や、生物学者の早稲田大学池田清彦教授、メルセデス・ベンツへ取材に行き、これからの環境問題や資源利用についての理解を深めました。

2「Education」

ユネスコや陰山英男教授へ発展途上国での教育問題や我が国の教育の現状について取材を行い、周囲の大人たちに求めること、また自分達ができることを考えました。

2009年度

1「子ども、教育」

スクールカウンセラー、モンスターペアレンツ、いじめについて、東京都教育庁や、作家の重松清さんへ取材に行きました。

2「裁判員裁判」

裁判員裁判制度でより身近になった裁判について考え、獨協大学法科大学院教授の野村武司さんにご協力いただき、模擬裁判を行いました。

テーマとは別に「若者の投票率をアップさせるためには」という疑問があがり、中野区選挙管理委員会へ取材を行いました。

2010年度

「東京都青少年健全育成条例」

不健全図書等を対象とした東京都青少年健全育成条例改正の概要を調べるため、東京都への取材を行いました。また影響を受ける出版業界の声を取材し、双方の立場の見解を比較、問題提起をしました。

2011年度

「震災後、私たちが考えること、出来ること」

東日本大震災を経て、今後の電力供給について資源エネルギー庁へ取材に行きました。また、原子力発電所の事故をふまえ、放射線に関する知識を得るため、東大医学部附属病院へ取材に行きました。

2012年度

「若者のインターネット利用」

1 SNS(ソーシャル・ネット・ワーキングサービス)のメリット、デメリット(危険性・依存性)等を調査するため、サイバーエージェント・ミクシィに取材に行きました。また、心理学的観点からの、SNSの危険性や依存性等について、東京大学大学院橋元良明先生に取材に行きました。

2 音楽やゲームファイルに係る著作権や違法ダウンロードに対する刑罰化等の詳細を調査するため、日本レコード協会・コンピュータソフトウェア著作権協会(ACCS)に取材に行きました。また、メンバーと同世代の若者が著作権についてどのような意識を持っているのか調査するため、アンケート調査を実施しました。

2013年度

1「なぜ流行はおこるのか」

流行はなぜおこるのか、どうのように広がっていくのかということに疑問を持ち、日本ファッション協会や日本流行色協会の取材を行い、ファッションの歴史や流行色の決まり方を調べました。また、様々な世代や国籍の人々が流行をどのようにとらえているのかについてのアンケート調査を行い、考察をしました。

2「日本のサブカルチャー」

日本のアニメーションや漫画など、いわゆる「サブカルチャー」と呼ばれるものについて知るため、日本動画協会やまんだらけ中野店を取材しました。また、自分たちと同世代の子どもたちが、「サブカルチャーにどのようなイメージを持っているのか。」を中心にサブカルチャーの定義について自分たちの意見をまとめました。

2014年度

1「2020年東京オリンピック・パラリンピック」

2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックについて、東京オリンピック・パラリンピック準備局への取材や、みんながどのような意識を持っているのか～被災地の同年代の子どもたちとの交流や身近な人からのアンケート調査で知ったことを交えながら取材やワークショップを通じて考えました。

2「和食」

世界無形文化遺産に登録された「和食」について、文化庁や農林水産省への取材を通じて学んだ定義を踏まえ、アンケートで見られた「和食」のあり様や「日本食」と「和食」の違いなどをワークショップで考察しました。

2015年度

1「憲法・法律」

話題になった時事問題を起点に憲法・法律とは何か、憲法・法律と時事問題の関わり、そして自分たちはこれから憲法・法律やそれらの問題とどう向き合っていくべきかなど、取材やワークショップを通じて考えあいました。

2「アミューズメント」

取材を通じて学んだ各アミューズメント施設の工夫やアンケートによって見えてきた“人がアミューズメントに求めるもの”などを踏まえ、自分たちの思う「アミューズメント」とは何かをワークショップで考えました。

2016年度

1「理想の町づくりとは」

福祉・環境・整備の視点から“理想のまち”とはどういったものなのか、理想のまちを作る上で大切なこと、課題となることについて調べてきました。

2「貿易の果たす役割」

“もし貿易が止まってしまったら日本はどうなってしまうのか”という疑問について取材やワークショップを通じて考えてきました。交流会では輸入の依存度が高い「石油」「小麦粉」に着目して来場者の方と意見交換を行いました。

2017年度

1「オリンピック・パラリンピック」

東京オリンピック・パラリンピックまであと3年を切りました。その時自分たちはオリンピックに対してどのように関わることができるのか、どう向き合っていくべきかを考えました。

2「教育」

「なぜ勉強しなければいけないのか」という命題について、関係機関への取材やアンケート調査を行い自分達メンバーなりの答えを考えました。また、経験という視点からボランティア活動にも目を向けボランティアとは何かを考えました。

2018年度

「流行」

”流行は誰が作っているのか””私達は流行に踊らされているのではないのか”。普段の生活の中にある「流行」とは一体何なのかについて考えました。

2019年度

1「校則」

”なぜ学校によって校則が異なるのか”、”校則はどのように決まっているのか”という疑問をはじめに、自分たちと校則の関わりや、校則を定める意味などについて考えました。

2「行列はなぜできるのか」

行列がもたらす効果や行列に対するイメージについて話し合い、行列ができる理由や心理的状況について考えました。

3中子育第 400 号
発　行　中野区子ども教育部
育成活動推進課　育成活動支援係
住　所　〒164-8501　中野区中野 4-8-1
電　話　03-3228-5648
ＦＡＸ　03-3228-5659